

世界語訳の細道

佐々木照央 Sasaki Teruhiro

(Pri mia traduko de “Streta vojo”)

『おくの細道』、これは題名の訳が難しい。「おく」という言葉が多義的である。奥州、遠隔地、そして深い内部、など。これを一語で置き換えるのは至難の業である。また「細道」も地理的な道、精神的な道、の両方を含んでいる。

ドンキホーテでは「騎士道の細道」という表現を使っている。

Sed mi, sub la influo de mia stelo, iras sur la streta pado de la kavalirismo. (ĉ.32:p.573)

東洋では「道」に老荘思想が入り込んでいるので、pado よりも vojo の方が相応しい。また、私がドンキホーテのこの部分を見つけたのは、世界語訳をした後のことであった。Streta pado de la kavalirismo が私の訳と重なるのを見て嬉しかった。英訳版では統一された題はない。

David Landis Barnhil: “The Narrow Road to The Deep North”

Donald Keen: “The Narrow Road to Oku”

Yusa Nobuyuki: “The Narrow Road to the Deep North”

Sam Hamill: “Narrow Road to the Interior”

Corman, Cid & Kamaike Susumu: “Back Roads to the Far Towns”

その他。

ロシア語ではマルコヴァとフェリドマン共訳で По тропинкам Севера (北の細道) としている。

世界語訳の題目を私が Streta vojo en fora interno としたのは芭蕉の旅が地理的外部に向かうだけではなく、自己の内面を探る旅である、と理解するためである。en という前置詞は al でもよい。

世界語訳に着手したのは 2008 年 9 月 16 日だった。様々な理由があるが、世界語訳『オネーギン』に啓発されたこと、栗栖継氏が日本文学古典の世界語訳の不足を嘆かれていたこと (ポンテート 225 号)、蕪村書簡集のロシア語訳を手伝ったこと、オランダで自分の世界語力の不足を痛感し何とか真剣な訓練をしたいと思ったこと、そして何よりも芭蕉が好きであったこと、などによる。

訳にあたっては、可能な限り直訳し、余計な意識を避ける。主語の無い俳句では、可能な限り主語を入れないように努力する。宮本正男の日エス辞典は常に参照するが、それにとらわれないこと。また世界語読書中に遭遇した良い表現は書きとどめておくこと。また、最も大事なことだが、この訳はほんの第一歩であって、次に何度も研磨するための素材であること。自分の技量の向上を待って翻訳に着手するというのではなく、翻訳作業の間に技量を向上させ、また何度も推敲する時期をおく。詩的表現については、詩人の能力を持

つ世界語者に後に見せて彫琢してもらうこと。

幸いなことに世界語は語順が自由であるから、日本語の語順さえ反映させることができる。多分、技量が向上すれば、地上のあらゆる言語よりも忠実な訳ができるだろう。世界語訳で日本文学の古典を読むことが、日本語力の未熟な人々にとって最も良い日本文学理解につながる、ということになれば良いと思う。そうなれば、日本文学に関心のある人々にとって、世界語訳の読書が必須となり、エスペラント普及運動にとっても効果がある。芭蕉、蕪村、一茶を勉強するためには、世界語を学ぶのが近道である、という段階に到達することを私は目標としている。前に『オネーギン』の世界語訳の論考で、今やロシア文学を勉強するにはエスペラントを学ぶことが必須の時代となってきた、と書いた。芭蕉を知るには、エスペラントを学べ、という時代が来てほしい。

各国語訳には各国語の特殊な意味が言葉に反映する。これが各国語への翻訳の短所でもあり、また長所でもある。エスペラントに訳す場合には、異なる土着の「国語」への変換ではないぶん、そのズレがより少ない。もちろん、日本語古文の美を世界語訳で完全に伝えることは不可能である。だが考えてみて欲しい。日本の古文の教科書的な現代語訳に違和感を持つ人は少なくない。その違和感は古文の音楽性、詩的表現が現代語によって減殺されることから来る。現代日本語訳でさえ、そのような欠陥が避けられない。世界語訳でそれに類した欠点が避けられないとしても当然である。

芭蕉を他の言語に翻訳する上で、多くの障害物がある。日本語の単語で多義的なものが使用されている場合、他の言語では多義性が伝えられず、意味を限定的にして移し変えなければならぬ。また、他の有名な詩を背景に俳句が作られている場合、その背景の取り扱いをどうするか？ 提示されているテキストだけ翻訳するか、それとも背景となっている和歌、漢詩なども紹介しておくか？ 言葉遊び、駄洒落、などの技巧をどうするか？ 固有名詞を音だけ伝えるか、それとも漢字の意味も伝えるか？ 等々、やっかいな問題点をいくつか紹介してみよう。

一 多義性

有名な出だし「月日は百代の過客にして、」の翻訳を検討してみよう。

Months and days are the wayfarers of a hundred generations, (David Landis Barnhill)

The months and days are the travelers of eternity. (Donald Keen)

Месяцы и дни – путники вечности, (В. Маркова, Н. Фельдман)

多くの訳者は月日を month, day としている。しかし、それを「月と太陽」と解釈する訳者もいる。

The moon and sun are eternal travelers. Even the years wander on. (Sam Hamill)

この文句はもともと李白の詩を念頭に書かれており、「月日」は原文では「光陰者」であった。こうなると訳語を決めるのは翻訳者の解釈である。文学では「多数者」が正しいとは限らない。私のは多数者と同じ訳になった。

Monatoj kaj tagoj estas pasantaj gastoj por eterne,

二 芭蕉俳句の技巧と音

次の句で芭蕉の技巧の特徴を分析してみよう。分析方法はロシア文学で二十世紀初頭にシンボリストやフォルマリストが音と意味の美を探究するために使った方法である。

あらたふと 青葉若葉の 日の光

so holy:

green leaves, young leaves,
in sun's light (Barnhill)

How awe-inspiring!

On the green leaves, the young leaves
The light of the sun (Donald Keen)

Ah speechless before

these budding green spring leaves
in blazing sunlight (Sam Hamill)

Как величава!

В листве молодой, зеленой,
Блеск светлый солнца... (Маркова, Фельдман)

Kiel kara!

Tra verdaj folioj, tra junaj folioj

Lumo de suno

[Ara tahuto aoba wakaba no hi no hikari]

「青葉若葉」の反復はどの訳でも伝わっている。意味の反復と音の反復 aoba wakaba これは詩の基本であり、反復は「韻」となる。芭蕉のこの俳句の特徴は、音と意味が幾重に

も重ねられていることである。初めの「あら」ara は締め括りの「ひかり」ari と類似し、頭と尾が音で一致している。真中は「青葉若葉」、頭尾は「あら・あり」で、中一致両端一致 A・B・B・A の構造になっている。さらに、最初の「あらたふと」は逆読みすると「ふたら」を含む。つまり、この句の頭と尾は「二荒」山と「日光」となる。だから芭蕉は前もって次ぎの文を置いている。

往昔、この御山を「二荒山」と書きしを、空海大師開基の時、「日光」と改めたまふ。

このような複雑な技巧が込められている俳句を完璧に翻訳することは不可能に近い。多分、注で補って解説するしか方法はあるまい。また何故私は tra という前置詞を使うか。他の訳者たちは on や in を使用しているのである。実は、ドストエフスキイにある、木の葉を通してさす陽光の美しさ、透ける葉脈の美を感じた人は善人である、という意味の文章に私は惹かれていた。訳は訳者の主体的環境に作用される。

またこの句にはロシアの詩人ブリューソフが発見した子音の技巧の型 alliteration (aliteracio)が多く含まれている。

- 1) 「ひのひかり」 hi no hikari 頭韻一致 O _ O _
- 2) 「青葉若葉」 aoba wakaba 尾韻一致 _ O _ O
- 3) 「あら・あり」 ara - ari 両端一致 O _ _ O
- 4) 「青葉若葉」 中一致 (全体の真中で反復) _ O O _

そのような音と意味の技巧は他の有名な句でも用いられている。

夏草や 兵どもが 夢の跡

Somera herbo -

La sekvo de songô

Por batalintoj

[Natu kusa ya tuwamono domo ga yume no ato]

無常感あふれるこの句は杜甫の「国破れて山河あり」と重なる。つまり、杜甫の詩、源氏、藤原の興亡、がこの句の中に歌われ、なお未来をも歌う永遠の詩となっている。音の共鳴も素晴らしい。

Natu - no ato つまり、NTという子音が両端で反復されている。それは音が終わると、そのまた始まりの音に戻る、という現象を引起し、この詩は永劫回帰する。

tuwamono - yumeno ではMNが反復する。初めの5字の終り ya が締め括り5字の初めの yu と共鳴する。tuwamono - domo では t と d が頭の音の反復となっている。清音が

濁音に変わるだけである。

このような音の技巧を翻訳することは不可能である。

summer grass –

all that remains

of warriors' dreams

(Barnhill)

The summer grasses –

Of brave soldiers' dreams

The aftermath

(Donald Keen)

A thicket of summer grass

Is all that remains

Of the dreams and ambitions

Of ancient warriors

(Nobuyuki Yuasa)

Летняя трава!

Павших древних воинов

Грез о славе след

(Маркова, Фельдман)

このように外国語訳を見てみると、芭蕉の句自体の特徴がはっきりとわかる。つまり、数少ない言葉で、豊かな意味、美しい音響を創造している。簡潔、深遠、響き、これは日本語の詩的表現の模範である。このような句を他の言語で翻訳するのは、ただ直訳して、芭蕉の詩才に頭を下げるしかない。

三 単数複数問題と絶対矛盾の自己同一

日本語に単数複数概念が希薄であるから、印欧語にそれを訳すとなると訳者が自分の理解で数を決定しなければならない。そうすると、単数と複数では情景、雰囲気が大きく異なることがある。

閑さや 岩にしみ入る 蟬の声

これは極めて難解な句である。もし蟬がいつせいに鳴きだしたら騒がしい。一匹の蟬が鳴くのはほんの一瞬で、他の蟬があとから合唱する。単数であれば「閑静」と理論的には整合する。しかし、単数なら瞬間的情景である。また人によっては、静かに鳴く蟬と騒々

しい蟬との種類別を試みて、この芭蕉の蟬は何種の蟬か、特定しようとするかもしれない。矛盾をそのまま矛盾として採用するか、あくまで理論的整合性を採用するか、でこの訳は変わってくる。

stillness –

penetrating the rocks,

cicadas' cry

(Barnhill)

How still it is here –

Stinging into the stones,

The locusts' trill.

(Donald Keen)

In the utter silence

Of a temple,

A cicada's voice alone

Penetrates the rocks.

(Nobuyuki Yuasa)

Lonely stillness –

a single cicada's cry

sinking into stone

(Sam Hamill)

Что за тишина!

Так пронзительны средь скал

Голоса **цикад**

(Маркова, Фельдман)

上の英訳2つと露訳の蟬は複数で、下の2つは単数で訳している。ところが、エスペラントではこの問題は日本語と同じようにあいまいに処理できる。形容詞にすればいいのである。

Ho, kvieteco,

Penetranta en rokojn

Cikada trilo

さらに、定冠詞を使うか、不定冠詞にするか、これも訳者の感覚次第である。ドナルド・キーンは定冠詞にしているが、他の訳者はそうしていない。またロシア語や日本語には冠詞がない。ドナルド・キーンはこの問題について次のように書いている。

「日本文学のほとんどの作品の翻訳は、日本語に長けた者にさえ困難である。訳者を常に困らせる二つの例をあげよう。それは先ず、単数と複数の区別そして定義と不定の区別の欠如である。これにより、作者が本当に何を意図していたのか訳者が決断を下すことになる。作者が存命ならば教えてもくれるが、いつもそうはいかない。私が安部公房の『緑色のストッキング』を訳していた時、ストッキングは単数か複数かを聞いたところ、安部さんはただ笑い、それは訳者の問題で自分とは関係ないと言われたのである。」 [5:6]

音声の技巧は翻訳不可能である。ドナルド・キーンが「sting 突き刺す」としたのも多分、その音声のしつこい反復によるであろう。

Sizukasa ya iwa ni simi iru semi no koe

S-z-s, simi-semi の同音反復が、蟬の数さえ複数にする理由の一つかもしれない。

また母音の配列（ロシア語では「アソナンス асонанс」という）が見事である。初めに a の多用、中に i の多用、そして最後は e, o で締める。日本語の母音を十分に配列しているのである。（日本語の u は弱いので無いに等しい）

それにしても、蟬の声を「しずかさや」と表現する感覚は松尾芭蕉独自のものである。地上でほんの僅かな時間しか生きられない蟬の音が、より長い時間存在しつづける「岩」に「しみいる」、またその光景は毎年反復される。そして詩の中では永遠の情景となる。

四 本歌取りの処理

田一枚 植えて立ち去る 柳かな

この句の背景には西行の和歌がある。翻訳の際にこれをいかに処理するか？注に入れるもの、本文に併記するもの、名前だけでも本文に入れるもの、と様々である。バーンヒルは注で、ハミル、ドナルド・キーンは本文に名前だけ、ロシア語は西行の歌全文を併記している。芭蕉の紀行文は歌枕を尋ねる旅である。能因法師、藤原定家、その他日本の詩聖の作品、李白杜甫などの漢詩、が常に背景に意識されている。本文にその詩すべてをいれたら、芭蕉独自の簡潔な世界が破壊される。また注で処理すれば、注が膨大になる。

a whole rice paddy

planted – I depart

from the willow

(Barnhill)

They sowed a whole field,

And only the did I leave

Saigyo's willow tree.

(Donald Keene)

When the girls had planted
A square of paddy-field,
I stepped out of
The shade of a willow tree. (Nobuyuki Yuasa)

Rice-planting done, they
depart – before I emerge
from willow shade (Sam Hamill)

Уж в целом поле
Посажен рис? Пора мне.
О тень под ивой! (Маркова, Фельдман)

私は、以上の訳全てにある「私」という主語を省いて直訳してみた。

Unu rizkampon
Plantinte,
Foriras la saliko.

昔、西行が立ち寄って和歌「道のべに清水流るる柳かげしばしとてこそ立ち止まりつれ」を詠んだ時にはこの「柳」の傍には川が流れていた。しかし、今は田んぼになっている。西行は清水の川を、自分と田植え人は田んぼを立ち去る、次はまた人も風景も変化するだろう。詩の中で永遠なる「遊行柳」も無常の現実では枯死する。「柳」は現実の柳と詩の柳である。西行の詩は不朽だが、自然と人間（田植えの早乙女や自分）は去り、変わる。すべて「しばし」である。私はそう解釈した。ある日本語の解説によれば、次のように現代語にしてある。

「これが西行の立ち寄った柳かと、感慨に耽っていると、目の前の田では、人々が田植えに励み、自分がぼんやりと感慨に耽っている間に、いつの間にか一枚の田を植えて立ち去ってしまった。自分も、しばらくの物思いから覚めて現実にもどり、柳の陰を立ち去ったことである。」 [2:84]

芭蕉自身が「柳の下を立ち去るのは早乙女と自分である」、と解説しているが、万物は立ち去る、流れる。私は、そういう感想のもとに、直訳してみた。ただし対格にするか、主格にするかは決断しなければならない。対格にするには主語（私）をいれなければならない。それで、柳が立ち去る、とし、その柳に遊行僧、自分、田植え人、自然、の全てが象徴されるようにした。

五 翻訳不可能な言葉遊び

蛤の ふたみに 別れ 行く 秋ぞ

この句で細道は締め括られている。それほど重要な句であり、落語でいえば「オチ」である。しかしこの句は一句の中では翻訳不可能である。外国語で、どう訳されているか。

Like a clam from its shell,
setting off for Futami Bay:
departing fall (Barnhill)

Dividing like clam
And shell, I leave for Futami –
Autumn is passing by (Donald Keen)

Clam ripped from its shell,
I move on to Futami Bay:
passing autumn (Sam Hamill)

As firmly cemented clam-shells
Fall apart in autumn,
So I must take to the road again,
Farewell, my friends (Nobuyuki Yuasa)

О, хамагури
В заливе! Вот уходим
И я, и осень... (Маркова, Фельдман)

どの訳も苦しんでいる。しかしオチにならない。拙訳も以下のとおりであり、これから推敲、研磨する必要がある。

Kiel meretriko
Disiĝas en du partoj,
Adiaŭante, mi iras nun al Hutami,
Pasas aŭtuno

かけことば、駄洒落、言葉遊び、などはそのまま翻訳することは不可能である。ところが、この技巧は日本文学には結構多い。たぶん、注釈で処理すべき事柄なのであろう。そうなると、注釈には駄洒落解説で多くの頁が費やされることとなる。しかし、同音反復が韻の元であると同じく、同音意義の言葉遊びも詞的表現である。同一音で多義を表現する、つまり聴く者にとっては二重の響きがある。

今後の課題

ドナルド・キーンも指摘しているように、そして日本人読者のほとんどが感じているように、「『おくのほそ道』を現代の日本語に訳す難しさは、ほとんど西洋の諸国語にうつしかえるかのようである」[5:8] すなわち、現代日本語に翻訳するのと他の諸言語に翻訳するのと、難易度はほとんど変わらない。また解説書、研究書の類は多すぎて、その道の権威の手垢がべっとりとくっついている。私は、ロシア文学を多少読んできた。外国文学と比較した時、芭蕉への尊敬はなおいっそう高まる。ロシアの余計者主人公は旅を住みかとする。芭蕉はそのはるか前である。すでに全世界に芭蕉愛好家はいる。俳句はいまや欧米、ロシアで盛んである。各国語での芭蕉訳は各国の文学の発展に寄与している。では世界語に翻訳する意義はどこにあるか？

世界語エスペラントは最も直訳に適する言語である。この信念のもと、私は可能な限り忠実に直訳していくつもりである。バーンヒル氏の英訳も直訳が基本である。しかし、本当に直訳すると、英語ではこうはいわない、という批判も当然起きてくる。私がロシア語の通訳をはじめた頃、「あなたのロシア語は文法的には正しいが、ロシア人はそうは言わない」と言われいつも口惜しい思いをした。世界語は文法的に正しければ許容される。文法的には正しいが習慣的にはこうはいえない、ということがない。もし翻訳者の技量が高まれば、諸国語の中で、世界語訳が最も原文に忠実となるはずである。私自身の技量はまだあまりにも低い。これから世界の古典の世界語訳を熟読し表現を習得しながら、語学力を高めていこうと決意している。芭蕉との対決の旅はその語学力向上のための修練の場である。「意」の漢字は「音」と「心」を結合している。世界語で「美しい音」と「深い心」が伝えられるよう、日々学習していきたい。

関連文献

- 1) 新訂『おくのほそ道』。 穎原退蔵、尾形侑訳注。 角川文庫、昭和 58 年発行
- 2) 松尾芭蕉集 2 紀行・日記編、俳文編、連句編。 日本古典文学全集 71、小学館、1997 年
- 3) 芭蕉文集。日本古典文学体系。岩波書店、昭和 34 年
- 4) Basho's Journey. The Literary Prose of Matsuo Basho. Translated with an

Introduction by David Landis Barnhill. State University of New York Press, 2005

- 5) ドナルド・キーン訳、松尾芭蕉 『おくのほそ道』 The Narrow Road to Oku。講談社
インターナショナル、2006年
- 6) Matsuo Basho, The Narrow Road to the Deep North and Other Travel Sketches.
Translated from the Japanese with an introduction by Nobuyuki Yuasa. Penguin
Books, 1966
- 7) Matsuo Basho, Narrow Road to the Interior and Other Writings. Translated from
the Japanese by Sam Hamill. Shambhala, Boston & London, 2000
- 8) Мацуо Басе, По тропинка Севера. СПб., изд-во «Азбука-классика», 2007